

J.S.バッハの教育目的に書かれた作品のなかでもその芸術性において最高峰と言われる《平均律クラヴィーア曲集》は第1巻と第2巻があり、それぞれ長短24のすべての調による前奏曲とフーガで構成されている。第1巻は、バッハのケーテン時代1722年に完成。その冒頭を飾る「第1番 ハ長調」の前奏曲はシャルル・グノーが声楽曲「アヴェ・マリア」の伴奏として用いたことでも有名。フーガは四声のフーガとなっている。第2巻はバッハのライプツィヒ時代1742年に完成した。第1巻に比べてより音楽的内容に富んでいる。「第22番 変ロ短調」は、この曲集においても頂点をなす作品で、長大な主題による前奏曲に続いて、二重対位法が駆使されるフーガ。

ハイドンの「変奏曲 ヘ短調」は、二度のロンドン滞在の狭間である1793年にウィーンで作曲された。ロンド変奏形式で、49小節に及ぶ長大な主題は、ヘ短調とヘ長調の部分からなり、この2つについての変奏が交互に進み、コーダに入って一瞬の激しさを見せてから、消え入るように終わる。作曲の動機として有名なのは、同年1月の友人であるマリア・アンナ・フォン・ゲンツィンガー夫人の死去である。

「ピアノ・ソナタ 第10番」は、モーツァルトのウィーン時代における1783年の作品。アルフレート・アインシュタインはこの作品を「かつてモーツァルトが書いた最も愛らしいもののひとつ」と評した。翌年にウィーンでピアノ・ソナタ第11番、第12番とともに3曲まとめて出版された。第1楽章アレグロ・モデラートは、ソナタ形式。愛らしい主題に始まり、新たな楽想が軽やかに生まれるその天衣無縫さに心打たれる。第2楽章アンダンテ・カンタービレは、三部形式。簡素な旋律が何かを語りかけるように歌われる。第3楽章アレグレットはソナタ形式。ロンド風の活気ある楽章で、展開部には小さな間奏曲が用いられている。

J.S.バッハの次男カール・フィリップ・エマヌエル・バッハは、18世紀ドイツの作曲家。父バッハよりも名付け親であったテレマンの作曲様式を受け継いだと言われている。宮仕えのベルリン時代を経て、後半生はハンブルクでカントールの職に就き、その地で没した。「自由な幻想曲」は、死の前年1787年に作曲された。アダージョでひたひたと始まり、ラルゴでひっそりと終わるこの幻想曲は、自由と言えばあまりに自由、消える小節線、脈絡なく始まる楽想、まるでインプロビゼーションを聴いているかのような錯覚に陥る。ヴァイオリンとピアノによる別バージョン(Wq.80/H.536)もあり、こちらには「C.P.E.バッハの感情」という副題が付けられている。

ウィーンのミュラー人形館の所有者であるヨーゼフ・ダイム伯爵の依頼で、モーツァルトは3曲の自動オルガン用作品を書いている。「自動オルガンのための幻想曲 K.608」は1791年に2番目に作曲されたもので、アレグロ・アンダンテ・アレグロという3つの部分で構

成される。現在でも演奏機会が多い曲で、4声で書かれていることもあり、モーツァルト自身によって4手ピアノ用にも編曲されている。

ベートーヴェンは1802年に「幻想曲風ソナタ」というタイトルの2曲のピアノ・ソナタをウィーンで作品27として出版した(第13番、第14番)。ここにおいてベートーヴェンは、それまでの古典的な様式美から、より自由なピアノ・ソナタへと向かう。自筆譜に1801年と記載がある「ピアノ・ソナタ 第14番《月光》」は、ベートーヴェンが恋心を寄せた伯爵令嬢ジュリエッタ・グイチャルディに献呈された。「月光」という標題は音楽評論家でドイツ・ロマン派の詩人ルートヴィヒ・レルシュタープが名づけたものである。全3楽章からなり、第1楽章アダージョ・ソステヌートの夢見るような序奏は、まさにレルシュタープの言う「月光の波に揺らぐ小舟のような」雰囲気を漂わせる。第2楽章アレグレットは、トリオを挟む三部形式の可憐な中間楽章。唯一ソナタ形式で書かれた第3楽章プレスト・アジタートは、ソナタ形式。一転して荒々しく上行する分散和音で始まり、緊張をはらんで流れるような第2主題に続いて、新しい楽想がスタッカートで刻む。全曲の重心がここに置かれているような楽章である。